

海と空 ― 櫻野の人々 ―

「助かった。」

救援機の車輪がテヘラン空港の滑走路を離れた瞬間、私は「ああ、やっと戦禍のテヘランを離れることができた」と実感した。周りを見ると家族連れの多くは抱き合って泣いている。

昭和六十年（一九八五年）三月、イラン・イラク戦争のさなか、イラン在留の日本人たちは、テヘランから脱出しようとしていた。しかし、テヘラン空港に乗り入れていた各国の航空機は自国民を優先するため、日本人の搭乗の余地はなかった。私を含め日本人の全てが不安と焦りの中にいた。その緊迫した状況の中で救いの手が差しのべられた。トルコ政府が取り残された日本人救援のために飛行機を出してくれたのだ。こうして私を含めた二一六人が無事脱出できた。危機一髪だった。

なぜトルコ政府が救援機を出してくれたのか。なぜトルコだったのか。この疑問を持ったまま、二十年近くも経ったある日、偶然、「イランからの脱出く日本人を救出したトルコ航空く」というシンポジウムがあることを知った。私は次の日曜日、予定を変更して、電車を乗り継いでM市へ出掛けた。

シンポジウムでは、トルコ政府が、飛行機を出してくれた背景に、トルコ人が親日的であることが強調されていた。そして、トルコ人が親日的になった第一の理由として、エルトゥールル号の遭難者を救助した野の人々の話があることを知った。

しかし、親日的であるということだけで、あの危険な状況の中で、自国の国民よりも優先して日本人の救出に当たれるものだろうか。シンポジウムを聞いても、私の疑問は完全には解消しなかった。どうしても櫻野に行ってみなければ、エルトゥールル号遭難の顛末を知らなければならぬと思った。

和歌山県串本の向かいの大島に檜野はある。今では、巡航船ではなく橋が架かり車が行き交う。私が妻と一緒にトルコ記念館を訪れたのは春の暖かい日だった。

展示室は思ったよりもこじんまりしていて、エルトゥールル号の説明、写真や手紙などをじっくりと見て歩いた。しかし、まだ私は納得できず、いささか失望の思いで展示室を出ようとしたところ、出口のところに、分厚いファイルが置いてあることに気付いた。手に取ってみると、『難事取扱二係ル日記』と記されている。当時の大島村村長の沖周おきまのなながエルトゥールル号遭難の経緯と事故処理について書き綴つづったものだった。ページをめくってみると、旧字体と片仮名を使ったもので、読みやすいとは言えなかったが、何か分かるかもしれないと思い日記を読み始めた。

しばらく読みふけり、ふと目を上げた時、館長が声を掛けてきた。

「ずいぶんと熱心にござらんになっていますね。」

「最初は商船だと思っていたのですね。軍艦だと知って驚いたでしょうね。救助活動としかるべきところへの連絡、事故処理等すごいですね。」

館長は、何かの研究かと尋ねてきたので、私は、イランからの脱出と、シンポジウムのことを話した。

「そうですね。大変な思いをなさったのですね。」

「でも、まだ何だか分からないのです。なぜトルコの救援機が危険を冒してまで日本人を救出してくれたのか。」



館長は、私の言葉に頷いた。

「私も、沖日記を読みました。そうした公的な記録と共に、エルトゥール号遭難時の檜野地区の様子を伝える話もあります。おじいさんやおばあさんから直接、トルコ人救出の話が伝わっているのです。」

あれは、明治二十三年（一八九〇年）九月十六日夜のことでした。この大島は串本に近い大島区、中部の須江区、そして東部の檜野区の三つの地区からなっていました。その東部の先に檜野崎灯台というのがあります。話はその灯台から始まったのです。

檜野崎灯台の入り口の戸が激しくたたかれた時、時計は夜の十時半を指していました。当直の乃美さんが、扉を開けると暴風雨の中から一人の外国人が倒れこんできました。乃美さんはびしょ濡れの外国人を抱きかかえて中に入れ、明かりの下でみると、服はあちこちが裂け、顔も手足も傷だらけでした。急いで同僚の瀧沢さん呼びました。二人の灯台職員に外国人は、身振り手振りできかんに何かを訴えます。瀧沢さんはその様子から、海難事故であると分かりました。それで、奥の部屋から万国信号ブックを持ってきてペーヂを繰りながら尋ねました。

「どこの国ですか。」

その男は、しっかりと赤地に三日月と星の国旗を指差しました。それはトルコの国旗でした。

瀧沢さんは、用務員を檜野地区の区長のもとに走らせるとともに、自身はその男の手当をし始めました。そうこうするうちに、次々と助けを求めトルコ人たちが灯台にやってきました。

他方、トルコ船の遭難の知らせを受けた檜野の人々は、急いで灯台下の断崖に向かいました。恐怖と疲労のあまり口も聞けないトルコ人を、檜野の人々は、両側から支え、歩けない者は背負い、灯台と檜野の村に運び込んだのです。

檜野の人々は、村の家々から浴衣ゆかたを集めて、トルコ人の濡れた衣服と取り替えさせました。でも、なかなか冷えた体の震えは止まりません。檜野の人々は、一晩中、手や足、背中と体中をこすって温め続けたそうです。

朝までに六十九人のトルコ人が救助されました。

困ったのは、食料でした。檜野地区の人たちは海に出て漁をしていたのですが、この年、漁獲量が減っていましたし、米の値段も上がっていました。だから蓄えた食料もほとんど無かったと言ってよいと思うのです。

ところが、檜野の人々は、トルコの人たちにありつただけの食料を提供しました。

「これでサツマイモは全部だな。」

「ああ、畑には何にも残つとらん。」

その時、一人の長老が穏やかに、しかし力強く言いました。

「トルコの方は大勢いなさる。畑のものだけでは足りんから、みんなの家のニワトリをさばくことになるが。」

……みんな、ええな。」

即座に、赤銅色に日焼けした男が太い声で答えました。

「当たり前じゃ。いざという時のために飼つとるニワトリじゃ。わしらもトルコの方も一緒じゃ。食べてもらおうや。」

「そうや、そうや。元気にお国へ帰ってもらいたいからなあ。」

非常用のニワトリを差し出すことに、誰一人たりとも難色を示すものはいません。

「檜田さん、コックの腕のみせどころや。頼むで。」

「いやあ、この年で、お役に立てるとは。おかあちゃんたちも手伝うてや。」

榎田さんは、以前に灯台に勤めていた英国人のところでコックをしていたことがあり、専ら調理を引き受けました。ニワトリを追いかけ捕まえる人、サツマイモを洗う人、火をおこす人、腕を運ぶ人、榎野の人々の心づくしの洋食がたっぷりとふるまわれ、負傷者は元気を回復していきました。

この後、榎野地区の畑には、一個のサツマイモも無く、家に一羽のニワトリも無かったということです。

エルトゥールル号は、トルコ皇帝の命を受けて、答礼として明治天皇に親書と勲章を贈呈するためにやって来ていました。無事任務を果たした特使オスマン・パシヤー一行を乗せたエルトゥールル号が榎野崎灯台下で遭難したのです。榎野の海から生還した六十九人は、明治政府の計らいにより軍艦「比叡」と「金剛」によって、無事トルコに送り届けられました。しかし、大多数の乗員は故郷へ帰ることはかなわず、水平線の見える榎野崎の丘に手厚く埋葬されたのです。

トルコ記念館を出た妻と私は、海を右手に見ながら榎野の丘に続く小道をたどった。

「百年以上も前だったのねえ。」

「そうだったんだなあ。」

私の脳裏には、イランからの脱出のこと、先日のシンポジウムのことなどが脈絡もなく浮かんでいた。



故国を遠く離れた異境の地で、しかも荒れ狂う嵐の海で、生死を分かつ危機に遭遇したトルコの人たちと、テヘランの空港で空爆の危機に瀕した私たち日本人とを重ね合わせてみた。

私たちは国際的規模の相互扶助によって助けられたことは確かだ。樫野の人々は、ただ危険にさらされた人々を、誰かれの別なく助けたかったに違いない。その心があつたからこそ、百年の時代を経ても色あせることなくトルコの人々の中に、親日感情が生き続けているということであろう。トルコが救援機を出してくれたのも、危機に瀕した人々をただ助けたいと思ったからに違いない。私は長年の疑問が氷解して行くような気がした。

私は、樫野の海を見た。

「海と空」

それが水平線で一つになっていた。